



ひらの動物病院
平野 由夫

対
談

生田目 康道
QAL startups

QAL startups

■ゲスト■

ひらの動物病院 院長 平野 由夫先生

獣医療を起点とし、人とペットの間にある課題を解決するスタートアップスタジオ「QAL startups」。その中心メンバーにして、獣医師・連続起業家である生田目康道（QAL startups代表取締役）が獣医師業界の様々なキーパーソンとの対話を通じ、様々なビジネスヒントを提供していく連続対談シリーズ。

獣医療業界における新規事業開発

生田目：平野先生は、1次診療の動物病院で30年以上のご経歴をお持ちで高度獣医療施設でのご経験や学会運営などを行われる中で、多くの企業と接点をお持ちだと思います。動物医療業界での新規事業に挑戦することについて、どのように受け止めていますか？

平野：動物医療業界への新規参入としては、30年近く前から様々な事業を見てきました。例えば、インターネットコミュニティ、ペット葬儀、ペットタクシー、動物病院経営コンサルティング、デザイン建築等です。小規模ベンチャーが趣向を凝らして様々な施策を行ってきましたが、現時点で活用されているサービスはほ

んどありません。また、動物病院の事業活動やハードの面も当時からほとんど変わっていません。「企業から動物病院」「企業からペットオーナー」といった単一方向的なアイデアではなく、動物病院とペットオーナー双方における要望の変化を捉えて、対応できるサービスであることが必要ではないでしょうか。

動物病院に必要なサービス

生田目：小動物臨床医として、平野先生が獣医療領域で足りていないと感じる部分はどこにあるとお考えですか？

平野：ペットオーナーと動物病院とをつなぐ点でまだまだ足りていない

点が多いと思います。ハード面では、動物病院内でのカウンセリングルームやお客窓口の設定などは、一部の大規模動物病院は行っていますが、まだまだ一般的ではありません。ソフト面では、ペットオーナー向けに本当に信頼できる公共情報を発信しているものはまだ存在していないですね。

獣医療がより発展するために

生田目：獣医療の発展という観点から、新規参入事業で注目領域はありますか？

平野：獣医師に対する教育としては、小動物臨床施設から発信される現場に基づいた臨床知見などはまだまだ不足していますね。同様に、学会や学術団体、大学やアカデミアからの疾病別のゴールドスタンダードな治療法やガイドラインに関してもまだまだ不十分だと感じます。動物看護師の国家資格化に伴い必要な、教育サービスも気になっています。

獣医師としてのキャリア

生田目：お子様が獣医師を志望されていると伺いました。獣医師の先輩として、またお父様として20代の獣医学生・獣医師に対して何を伝える必要があるとお考えですか？

平野：今の動物医療業界でどのような獣医師になってほしいのか、自分でも正直示しきれていないと感じて

います。ただ、今まで動物病院の運営上苦労してきた中で、不足していると感じている点は「動物病院を経営するという観点からの卒前教育」「人材をマネジメントする点での卒後教育」であり、多くの獣医師が必要だと感じているのではないのでしょうか。また、動物病院を開業して、借金返済が完了し、売上が安定した際に獣医師としてのモチベーションが下がったことがありました。周辺の先生に聞いても同様の回答があります。自分の場合は、高度診療施設や学会運営の経験を積むことができたので大丈夫だったのですが、今後の先生には開業獣医師に対してマルチキャリアの支援や情報を提供することは重要になるのではないかと感じています。

獣医師による事業開発への挑戦

生田目：平野先生は、学会や地域勉強会などでも若手獣医師の方と接する機会が多いと思います。獣医師が新しい事業に挑戦する機会も増えてきました。彼ら彼女らに伝えたいことはありますか？

平野：学術的な原理原則や関係法規にのっとった獣医療サービスの提供については、ほとんどが既に知られたものであったり、サービスとして提供された歴史があります。昔はポケベル獣医師なんてものもありましたね（笑）。自分がひらめきを基に見つけたものは、車輪の再発明の可能性が高いことを、心しておくべきです。

動物病院は、毎日がペットオーナーと向き合い、話し合い、付き合い続けていくサービスです。そこに必要とされるものは、確実にサービスを届けて、持続的に提供されるコンテンツづくりです。動物医療業界での不満不安不便を本当の意味で解決するサービスが提供されることを期待しています。

生田目：なるほど、ありがとうございます！



平野 由夫

ひらの動物病院 院長

- ・1991年：日本大学農獣医学部獣医学科卒業後、神奈川県内の動物病院、ならびに日本大学家畜病院(現ANMEC)に医局員として勤務('95年)
- ・1992年：神奈川県大和市にてひらの動物病院を開業
- ・2006年：日本動物高度医療センター腫瘍科非常勤勤務医兼務('09年)
- ・2016年：日本獣医再生医療学会理事('18年)
- ・2018年：一般社団法人日本獣医再生医療学会常務理事
- ・2020年：一般社団法人日本獣医再生医療学会副理事長
- ・2020年：農林水産省動物再生医療製品等・バイオテクノロジー応用医薬品薬事審議会委員
- ・2021年：農林水産省動物用医薬品再調査会委員



生田目 康道

獣医師、連続起業家。2003年に独立起業。その後17年で動物医療領域を起点とした7社の創業と経営を経験。2009年には、株式会社ペティエンスメディカル（現株式会社QIX）代表取締役社長に就任。ペットとペットオーナーに"本当に必要なモノ"を提供すべく顧客ニーズと時代変化を見据えた数々の商品を手掛ける。

2018年12月より掲げた、動物の生活の質（Quality of Animal Life）つまりQALを向上させるというビジョンのもと、2020年に株式会社QAL startupsを設立。業界内外のパートナーとともに、QAL向上に資する各種プロダクトと事業の開発に取り組んでいる。

《 対談後記 》

この対談シリーズでは動物医療市場における事業開発が主なテーマ。動物医療や動物病院市場への新規参入を検討している法人、新規で独立起業を考えている起業家予備軍を想定した対談内容となっている。第二回目は、開業30年になる動物病院経営者である平野院長と対談させていただいた。平野先生は、新規参入検討企業からの様々な相談を受けながら自らも腫瘍科や再生医療など新しい動物医療分野を開拓してきた臨床家。この30年間の業界の変遷を見ながら、ペットオーナーサイドから発想するビジネスだけではなく、動物医療従事者に対するヒトにかかわる分野の事業がまだまだ不足していると説く。教育、技術向上など医療の原理原則とビジネスの原理原則を両立させながらより動物医療を発展させていこうとする姿勢は大変学びがある対談だった。